

D分科会 テーマ「子どもにとっての運動・スポーツの現状と課題」

座 長 木村和彦氏

パネリスト 内藤久士氏、菊幸一氏、森丘保典氏

D分科会では、「子どもにとっての運動・スポーツの現状と課題」をテーマに掲げ、こうした問題に対する指導者のリテラシー(情報を的確に読み解き、またそれを活用するために必要な能力)を高めることを目標に、各パネリストに事例を交えながら発表いただいた。

はじめに筑波大学の菊氏から、子どもから見た現状と課題と大人から見た現状と課題というものはズレがあるということをまず認識することから出発しなければいけないとの話があり、小学校でのアンケート結果などを交え、子どもと大人の認識のズレについて発表があった。これに加え、同氏から、私たちの見方あるいは不安感といったようなものが、メディアの影響を受けながら形成されているとの指摘があり、ある種不安をあおるような形で提供される子どもの体力をめぐる問題についても、こうした不安感を持つ前に目の前にいる子どもたちの様子を自分の目でしっかりと見つめつつ指導に当たることが大事であるとの意見があった。

次に順天堂大学の内藤氏より、体力問題を平均値だけで問題とすることの危険性や、体力の高い者と低い者の差が非常に大きくなってきていることを示した研究についての発表があった。また、体力低下の問題を体格要素との関係で捉えた場合、体力自体はここ20年ではなく、かなり前から低下傾向にあったのではないかという指摘があり、栄養状態や体格という視点を加味しながら、この問題を捉える必要があるとの意見があった。

続いて日本体育協会の森丘氏から、優秀選手と一流選手の違いとして、優秀選手はけがをしやく、そのために競技を続けることができないことが様々な研究から明らかになってきているとの話があった。その原因の1つとして早い段階での十分かつ全面的な発達に欠けていた可能性があるとの仮説が提示され、けがをしやすいがために一流選手まで到達せずに引退となってしまうのではないかという話があった。さらに同氏からは、全面的な発達と動機づけ、心の問題として何か外の目標を目指してスポーツ・運動を行っていくというよりも、そのスポーツ自体のおもしろさといった内発的な動機づけを十分に引き出すための働きかけが大事なのではないかという提言があった。

最後に木村座長より、指導者・団が本分科会のテーマにどう働きかけていくべきかという話があり、子どもの必要と子どもの欲求をベースとし、しっかりとした学習理論に基づ

く指導が必要ではないかとの提言があった。さらに同座長から、これから日本スポーツ少年団として、本テーマにどうかかわっていくかを考えると、小学校低学年、あるいは就学前の子どもたちを含め、子どもの全発育・発達過程全体を踏まえた対応を少年団として行っていく必要が今来ているのではないか、こうした形で少年団がこれまで培ってきた力を地域に向かってさらにパワーアップして貢献していくことが今望まれているのではないかと、とのまとめがありD分科会は終了した。